“Fragments of Far-Off Melodies”：ワーズワスと『オシアン』の再評価

“Fragments of Far-Off Melodies”: Wordsworth and the Reassessment of *Ossian*

林　　智　之
HAYASHI Tomoyuki
（和歌山大学）

2022年７月18日受理

Abstract

In 1827, Wordsworth published “Written in a Blank Leaf of Macpherson’s Ossian,” and referred to the controversy over its authenticity. In this poem, he emphasizes the value of “ancient” fragmental pieces of *Ossian*, by naming famous classical poets like Orpheus and Musaeus, whose works had been lost. Until recently, it had been unjustly ignored as one of his later poems. However, we must consider that the poem was composed during the period of his translation of Virgil’s *Aeneid* in 1823-24. Actually, it refers to “Musaeus” in *Aeneid*. As Tim Fulford acutely points out, it is “one of the finest” poems because it shows the links of his translation and his own works. Wordsworth directly calls to “the Spirit of Ossian,” the narrator himself, instead of its “translator,” James Macpherson. This paper aims to examine Wordsworth’s elaborate work as a poet and translator by analyzing the poem.

序．ワーズワスと『オシアン』

18世紀後半～19世紀において、発見・収集された古い詩物語は文学者たちに大きな影響を与えた。その１つとして、ジェイムズ・マクファーソン（James Macpherson）は、「翻訳」により1760年『スコットランドのハイランド地方で収拾された古詩断片』（*Fragments of Ancient Poetry*, *Collected in the Highlands of Scotland*）を出版した。さらに彼は、1765年に『オシアンの作品』（*Works of Ossian*）として、３世紀頃のハイランドを舞台とする戦いの物語を発表した（図１の地図参照）。この物語はハイランド地方のゲール語（Gaelic）の「原典」から「翻訳」したものだと彼は主張した。だが、マクファーソンの贋作ではないかという疑惑が生じ、以後長い期間にわたり、本物か、偽物かという真贋論争が続いた[1)]。

この作品は、年老いて盲目になった詩人オシアンが、一族の過去の武勲、父親のフィンガルや息子オスカルと共に自分が戦場で活躍した物語を、戦死した息子の嫁のマルヴィーナに語って聞かせる枠組みになっている。論争とは別に、作品の内容は海外でも有名になり、ナポレオン・ボナパルトが愛読し、ゲーテは『若きウェルテルの悩み』（1774）でこの本を登場させた。さらに「オスカル」など登場人物の名前が流行するなど、各国で広く受容された[2)]。

1770年生まれのウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth 1770-1850）は幼少期から『オシアン』に慣れ親しんで、影響を受けていた（Landon 363）。また、1814年のスコットランド旅行の際、８月20～21日に旅先で、「『オシアン』の本を購入した」（Reed 566-67）記録がある。彼の蔵書（Wordsworth’s Library）にも収録されていたことが確認されている（Shaver 167）。

ワーズワスは、詩の主題としてもしばしば『オシアン』を使っている。その多くは、スコットランド旅行で創られ、旅の詩集に収められている。例えば、1803

図１　スコットランド地図　↑湖水地方（下部）

年のスコットランド旅行では「アルメインの谷」（“Glen Almain; or, the Narrow Glen,” 1807出版）、1814年の旅では「ダンケルドの近く、ブラン川ほとりの行楽地における心情吐露」（“Effusion, in the Pleasure-Ground on the Banks of the Bran, Near Dunkeld,” 1827年出版）や1833年の旅では「スタファ島の洞窟」（“Cave of Staffa”）が生まれている。これらの詩で、ワーズワスは『オシアン』をスコットランドの地名と結びついた作品として捉えている。

本論で扱うのは、ワーズワスの「マクファーソンのオシアンの余白に書かれた詩」（“Written in a Blank Leaf of Macpherson’s Ossian”）である。この詩の特徴は、題に地名が入っていないことで分かるように、直接的に旅と関係する作品ではないことだ。1824年頃に書かれて、1827年に初めて出版されたが、その後の1845年の編集によって便宜的に1833年の旅の詩集の中に収録された。この作品は、ワーズワスの最盛期以降1814年以後の詩であるため、十分な評価がされてこなかった。

だが、最近は、モーリーン・マクレーン（Maureen McLane）やティム・フルフォード（Tim Fulford）などの批評家が「ワーズワスの後期の傑作」と評価している。マクレーンは伝承作品をテクストにする際の問題を扱う点、フルフォードはこの詩が1845年に旅行詩に分類された点から、分析をしている。

しかし、詩の内容と執筆時の詩人の活動を関係させて論じる観点はこれまでなかった。詩を執筆した1820年代にワーズワスは、ウェルギリウス（Virgil）の『アエネーイス』（*Aeneid*）の翻訳に携わっていた。この翻訳は全12巻のうち３巻までしか行われなかったため、その価値が軽視される傾向にあった。だが、1907年に研究者ノエル・C・スミス（Nowell C. Smith）により、この詩には『アエネーイス』の一場面への言及があると指摘されており、このことはワーズワスの翻訳活動の重要性を示している。

フルフォードは、この詩を他の旅行詩と同列に論じており、詩と『アエネーイス』の関係の言及にまで至っていない。詩が1845年に旅行詩集に収録されたため、執筆された1820年代の詩人の翻訳活動が見落とされてしまっているのだ。またマクレーンが、『オシアン』等の古い詩において、時と共にテクストが失われる問題を考察したことは賛同できる。だが、この詩において、実在の古典のテクストの引用がなされている点を考慮していないと思われる。本論ではスミスが指摘したように、詩で『アエネーイス』が言及されている意味を解き明かしたい。

最後に「叙事詩（Epic Poem）」としての『オシアン』に注目したい（図２参照）。詩の最終連で、ワーズワスが、詩人オシアンを英国のジョン・ミルトン（John Milton）とギリシアのホメロス（Homer）に喩えたことに注目する。特に、ミルトンが詩人として英国に根ざした存在であるのに対し、オシアンがスコットランドと深く結びついた存在としてワーズワスは考えていたことを検証したい。

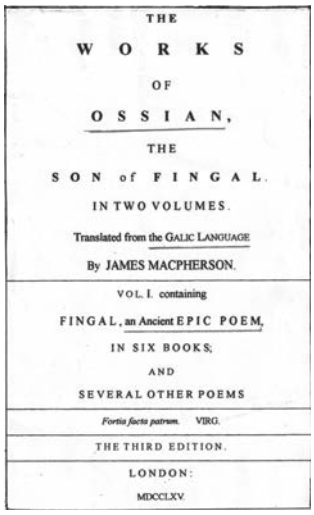
THE
WORKS
OF
OSSIAN,
THE
SON of FINGAL.
IN TWO VOLUMES.
Translated from the GALIC LANGUAGE
By JAMES MACPHERSON.
VOL. I. containing
FINGAL, an Ancient EPIC POEM,
IN SIX BOOKS;
AND
SEVERAL OTHER POEMS
Fortia facta patrum. VIRG.
THE THIRD EDITION.
LONDON:
MDCCLXV.

図２『オシアン』の表紙（下線は筆者による）

Ⅰ．『オシアン』にみる詩の断片テクストの問題

ワーズワスの「マクファーソンのオシアンの余白に書かれた詩」は、1824年頃に執筆され1827年の「情感と内省の詩集」（“Poems of Sentiment and Reflection”）に収められた。批評家モーリーン・マクレーンは2008年の著書でこの詩を「補足、続き」と捉えている。その理由をマクレーンは「『オシアン』により余白（“blank”）として残されたものに、書き込みがされているからだ」（McLane 235）と述べている。つまり、ワーズワスは『オシアン』を読み、その延長上で82行にわたる長い詩を自分で作ったといえる。

まず、この詩に関係する18世紀の『オシアン』の真贋論争について述べたい。エディンバラ大学のジェイムズ・マックィーン（James MacQueen）は、彼が監修した1971年版『オシアン』の序文で、ワーズワスのこの詩の第１連17-30行目を引用し、論争を説明する導入部とした。よってこの詩の中盤のオシアンへの呼びかけから論を始めたい。

> Spirit of Ossian! if imbound
> In language thou may’st yet be found, ...
> Let Truth, stern Arbitress of all,
> Interpret that Original,
> And for presumptuous wrongs atone;
> Authentic words be given, or none!
> (ll.17-18, 27-30)[3)]

ワーズワスは、『オシアン』の「翻訳者」マクファーソンが贋作者かどうかで紛糾した当時の論争の言葉を巧

みに使って詩を創っている。この作品が本物だと証明するには、マクファーソンが翻訳したと主張する「原典」(“Original”)が発見できるかどうかが大きな鍵であったからだ。

事態が動いたのは1805年で、調査機関のハイランド委員会(Committee of the Highland Society of Scotland)が、作者の主張する「原典」は見つからなかったと結論づけたのだ。その結果、『オシアン』の信憑性が失われた。たとえ詩の元の断片が本物だとしても、マクファーソンの創作により断片を繋ぎあわせた後世の作品だとして決着がつけられた。

先に見た通り、ワーズワスは幼少期から『オシアン』を読んでおり、この作品に愛着があった。しかし、世間が贋作扱いを始めた1805年の後、彼は時流に従ってこの作品を批判していた時期もあった。1815年詩集の「序文を補うエッセイ」(“Essay, Supplementary to the Preface”)において、彼は、マクファーソンが『オシアン』を創作していると批判した。このエッセイで、山地の舞台が多い『オシアン』の描写に関して「幸いにも山国に生まれ育ったので、私はほんの子どもの頃から『オシアン』の名で世間に出た本には、多くの虚偽があると感じていた。私自身が目にしたことから、そのイメージが偽物であると分かった」(“Essay” 77)と述べている。

だが、「山国」でもワーズワスの育った湖水地方とスコットランドのハイランド地方(図１再参照)は、地理も文化も違う。批評家フィオナ・スタフォード(Fiona Stafford)は、ワーズワスが「マクファーソンのゲール語資料の使用を審査できず…個人的な体験を語った。」(Stafford 53)と指摘する。本論では、1815年にワーズワスは、「翻訳者」マクファーソンを批判したが、作品自体は否定できなかったと考える。それから年月がたった1827年のこの詩では、詩人の『オシアン』への評価はより好意的になっている。

詩の引用部に戻り、Ifの条件法に続く次のLetで始まる３つの命令文をみていきたい。「真実の女神にその原典を解釈させよ。無思慮に犯した誤りの埋め合わせをさせよ。真正な言葉以外与えられないようにせよ。」という文がある。現実の論争に近いようだが、この審判は、ワーズワスの頭の中で行われていて、詩人に都合の良い判決が出されている。主観的な呼びかけや命令がこの「オシアンの余白ページに書かれた詩」を支えているからだ。

このように多くの行為を命令していることは、ワーズワスが「オシアンの霊」(“Spirit of Ossian”)が「言語の中に」いまだに存在すると考えていたことを示している。つまり、語り手である詩人は、『オシアン』というテクストに向き合って、「オシアンの霊」を呼び起こすため、自らの感情をぶつけているのだ。

ワーズワスには『オシアン』を世間の非難から擁護したい気持ちがあった。1829年４月23日の古典学者E．H.ベイカー(E．H．Baker)への手紙では、マクファーソンの「翻訳」の功罪を述べている。

> I consider myself much indebted to Macpherson.... Nor would I withhold from him the praise of having preserved many fragments of Gaelic Poetry, which without his attention to the subject [*Ossian*] might perhaps have perished. Most of these, however, are more or less corrupted by the liberties he has taken in the mode of translating them. (*Letters of the Later Years*. 1:365) (下線部は筆者)

この手紙では、当時の主流の考えと違って、ワーズワスは、「断片」(“fragments”)を保存したことを重要視している。彼が問題と考えたのは、マクファーソンが翻訳する際にとった「勝手さ」(“liberties”)のために、『オシアン』が損なわれたことである。

そのため、ワーズワスが「マクファーソンのオシアンの余白に書かれた詩」でとった戦略とは、題名以外、詩の本文の中では「マクファーソン」の名前を出さないことである。この82行の長い詩の中で「翻訳者」として重要なはずの「マクファーソン」が出てこないのは、意図的なものなのだ。

その代わり、「オシアンの霊よ」(“Spirit of Ossian!”)という呼びかけがある。これは、テクストの中の存在に生命を吹き込む行為といえる。物語の語り手である詩人のオシアンを「作者」として扱い、理想化された像を生み出しているのだ。後に扱う最終第５連では、呼びかけに対し「モールヴェンのさびしい岸辺に、不完全な伝説を通して鈍く光りながら、フィンガルの息子が現れる。」とオシアンが姿を現し、その様子は、ホメロスやミルトンに喩えられる。

詩の書かれた1824年には、マクファーソンの『オシアン』出版から50年以上たち、「原典」や「真正な言葉」を区別できない状態であった。しかしワーズワスは、手紙において古詩である『オシアン』という作品が残っているだけでも喜んでいる。そして作品を問題のマクファーソンと切り離し、「真実の言葉」だけのものにすることを願う。理想論ではあるが、彼の『オシアン』への強い愛着を感じる。

では彼の愛着を考察するため、詩の最初を見てみたい。“Oft have I caught...”と始まり、ワーズワスに近いこの詩の語り手「私」(“I”)が登場する。１人称の「私」が過去の体験を語ることで詩が始まるのだ。

> Oft have I caught from fitful breeze
> Fragments of far-off melodies.
> With ear not coveting the whole,

A part so charmed the pensive soul: (ll.1-4)

盲目の詩人オシアンが「風の音」を聞いたように、「私」は、『オシアン』という作品を「気まぐれなそよ風（“fitful breeze”）」にのった「音」として知覚する。その音は「遙かかなたの断片的な旋律」（“Fragments of far-off melodies”）と述べられている。このように、「私」の立場からの描写が多いのである。

つまり、ワーズワスに近い語り手の「私」は、論理ではなく、感覚を通して読者に語りかけている。その結果、先ほど述べた“Spirit of Ossian!”のようにこの詩には感嘆符（！）が多い。呼びかけや命令文に加えて、詠嘆表現が使われているのだ。そして語り手が魅力を感じたのは「部分」と言うことで、この詩は風景詩の冷静な外界描写とは一線を画している。

『オシアン』が最初の出版時に『古詩の断片』という題名であったことを踏まえ、第１章では「断片」について考察した。次章では、「古詩」にこだわり、３世紀頃の『オシアン』からより古いギリシア・ローマ文学へと詩の主題が繋がっていくことに注目する。詩を執筆したほぼ同時期の1823-24年に、ワーズワスが古典『アエネーイス』（前29～19年）の翻訳をしていたことに注目する。中でも６巻の冥府下りの部分をこの詩の中で言及したことを論じたい。

Ⅱ．ウェルギリウスの『アエネーイス』への言及

先述した批評家のモーリーン・マクレーンは、「この詩は、オシアンの問題が題材であるが、それをワーズワスは機敏にも詩自体の問題（“a problematic of poetry itself”）と判断していた。」（McLane 235）と述べる。つまり彼女は、古くなると依拠すべき「原典」がなくなる問題は『オシアン』に限ったことではなく、全ての詩にあてはまると言っているのだ。本論では、詩の展開を踏まえてこの考え方に賛成する。

第２連で、詩の語り手は、『オシアン』よりさらに古いギリシア・ローマの古典文学に目を向ける。作品が失われ詩人の名だけしか残っていない場合が多いと述べるのだ。後に論じるため、第２連冒頭の英語の重要箇所に下線部をひいて掲載したい。

Time.... 〔h〕ath preyed with ruthless appetite
On all that marked the primal flight
Of the poetic ecstasy
Into the land of mystery.
No tongue is able to rehearse
One measure, Orpheus! of thy verse;
<u>Musaeus, stationed with his lyre</u>
<u>Supreme among the Elysian quire,</u>
Is, for the dwellers upon earth,
Mute as a Lark ere morning's birth.
(l.31, ll.33-42)（下線部は筆者）

古代においては、詩は音楽でもあった。だが、有名なオルフェウス（Orpheus）であっても、その詩は時と共に消え去って、口承の言葉（“tongue”）としてさえも残っていないと、語り手は嘆いている。

それに比べて、先の1823年の手紙にある通り、『オシアン』のテクストの断片、「部分」が残っていたことは貴重なことであったとワーズワスは考えていたのだろう。ここで、オルフェウスと同じくギリシアの伝説の詩人である「ムサエウス」（Musaeus）という聞き慣れない名前が出てくる。

Oxford版、Cornell版の詩集の“Musaeus”の言葉の注では、1908年に、研究者ノエル・C・スミス（Nowell C. Smith）が「この部分はウェルギリウスの『アエネーイス』の６巻667行目と比較できる」（Smith 524）と述べたことが触れられている。本論では、スミスが述べたことを踏まえ、古典の該当箇所と詩のこの部分の類似性に着目したい。

古典の該当部分は、主人公のアエネアス（Aeneas）が巫女の案内で冥府に下り、英霊たちの住むいわば極楽浄土であるエリュシオン（Elysium）に辿り着く場面である。ここで登場するのがムサエウスで、巫女シビュラが主人公の亡き父の居場所を彼に尋ねている。なお、この箇所の前で、「裾の長い衣をまとった」オルフェウスが「調べにあわせて七つの音階を弾き分けている」（６巻：444-45行目）という描写があり、ワーズワスがこの詩を書く際に参考にしたのは間違いない。それでは、ウェルギリウスの『アエネーイス』（*Aeneid*）の６巻の666-669行目を日本語翻訳で引用する。なお、スミスが指摘した667行目と次行の部分には下線をひき、ラテン語原文も引用したい。

この者たちがまわりに群がってくると、
シビュラはこう語りかけた。この言葉は、
<u>とりわけてムサエウスに向けられた。大群衆の中央に彼がいて、肩の高さが見上げるほど他に抜きん出ていたからだった。</u>(ll.667-68)
(“Musaeum ante omnes (medium nam plurima turba/Hunc habet atque humeris exstantem suspicit altis)”)
「教えてくれ、幸福な霊たちよ、そなた、
最良の予言者よ。」（Virgil *Aeneid* 6：666-69）[4)]
（下線部は筆者）

古代には「予言者」は音楽家、詩人でもあることが多かった。さらに、「大群衆の中央」に位置することは、エリュシオンでも、周囲に尊敬されている証といえる。『アエネーイス』におけるこのムサエウスの描写が、詩の部分と対応するのだ。

研究者スミスの説を裏付けるように、この詩が執筆された時期の前後、1823～24年にワーズワスは『アエネーイス』の翻訳に携わっている。そして１～３巻、４巻の一部分、８巻の一部分をラテン語から英訳している。残念ながら、全巻の翻訳はならず、６巻にまでは実際には到達しなかった。だが、ワーズワスは以前の手紙で、ウェルギリウスの極楽浄土エリュシオンについて興味を示しており[5]、６巻の該当部分の翻訳に関しても試みたのではないだろうか。

それは、スミスに指摘されている２箇所を比較することで分かるだろう。古典原文の「大群衆の中央に彼［ムサエウス］がいて、肩の高さが見上げるほどに他に抜きん出ている」とこの詩の「エリュシオンの合唱隊の中で竪琴を持っている卓越したムサエウス」を比較すると、『アエネーイス』の一節が、この詩に合うように改編し挿入されていると言える。

ムサエウスの「高さが見上げるほど抜きん出ている」という描写は、古典解釈によればこの人物の「英雄らしい偉大さ」を示唆する表現（Winkler 656）とされる。そのためこの詩ではラテン語由来の英語“Supreme”「最高の」が使われている。

この詩のムサエウスの描写には、ワーズワスによる『アエネーイス』の解釈も表れている。『アエネーイス』における「大群衆」を「エリュシオンの合唱隊」（“the Elysian quire”）と彼は捉えている。また古典の原文には「肩の高さ」とあるが、これを優れた音楽家の特徴と捉えて、「竪琴」（“lyre”）をもたせている。彼は、ジェイムズ・マクファーソンの「勝手な翻訳」を批判しながらも、自分も解釈行為をしているが、それを詩の一節として巧みに発表しているのだ。

また、ブルース・E・グレイヴァー（Bruce E. Graver）は、ワーズワスの『アエネーイス』の翻訳の特徴を述べている。例えば「語彙面において、著者ウェルギリウスが用いた語を思わせるようなラテン語由来の英語（“Latinate kind of English”）を使っている」（Graver 264）と彼は主張しているが、“Supreme”にみられるように、この詩にもあてはまっている。

時期が近い他の詩にも『アエネーイス』の影響がみられる。批評家スティーヴン・ストライヤー（Steven Stryer）は1815年出版「ラーオダマイア」（“Laodamia”）が、６巻を題材とした詩と述べる（Stryer 578-79）。死者との対話とエリュシオンのモチーフが使われているからだ。またメアリー・ムアマン（Mary Moorman）は1815年出版の「イチイの木」（“Yew Trees”）の最後に登場する「幽霊のような姿」（“ghostly shapes”）に注目する。これらは「主人公が冥府で出会うもの」で「６巻に示唆されている」と批評家は主張している（Moorman 273）。以前にも同じ傾向があったのだから、古典翻訳を行っていた1820年代には、ワーズワスは特にこの箇所を意識していただろう。

第２連の中盤で、詩は古典の話題からいったん離れ、偉大な作品が世に残るのを阻む、生の厳しさが述べられる。語り手は「若くして静かな墓に埋葬されたり、希望と未来の正道を踏み外したりしている」幾千もの人々の運命こそ嘆くべきであると言うのである。そして第３連の53行目で、名も作品テクストも後世に残っている「より強い力をもつ詩人たち（“Bards of mightier grasp”）」を讃える。第４連の初めでは、彼らを「魂の兄弟たち（“Brothers in soul”）」と言い換えて次のように述べる。

> Brothers in Soul! though distant times
> Produced you, nursed in various climes,
> Ye, when the orb of life had waned,
> A plentitude of love retained....
> Ye lingered among human kind,
> Sweet voices for the passing wind:
> （ll.63-66 .68-69）

生まれた時代や育った環境は違っても、秀れた詩人と偉大な作品は、後世に残るだけの理由があると言われている。生命の源（“the orb of life”）が衰えた時も、作品にこめた愛情を失わなかったからだ。「魂の兄弟たちよ！」という詠嘆表現が表しているように、語り手の感情も頂点に達し、詩も終わりに近づいたようだ。

第４連では、第１連の「気まぐれなそよ風にのった遙かかなたの断片的な旋律」という言葉が「すぎゆく風のかぐわしい声（“Sweet voices for the passing wind”）」という形で反復されている。先に述べたように、これらの表現は、盲目の詩人オシアンが風の音を聞いて語りを始めるのに由来する。ワーズワスは、この詩において、詩人のオシアンが、「より強い力をもつ詩人」、「魂の兄弟」と呼ばれる人々にも近い存在であることを示唆しているのだ。

ここで、詩の語り手に近いワーズワスが考えていた「偉大な詩人」に関する手がかりがある。彼は1836年11月28日に政治家で文人でもあったトマス・ヌーン・タルフォード（Thomas Noon Talfourd）に宛てた手紙で、ワーズワスの尊敬する優れた詩人達が、晩年に代表作を執筆したことについて述べている。

> Chaucer’s and Milton’s great works were composed when they were far advanced in life.... Homer’s thunder and lightning were kept up when he was an old man and blind. Nor is it unworthy of notice that the leading interest attached to the name of Ossian is connected with gray hairs, infirmity, and privation. （*Letters of the Later Years*. 2:817）（下線部は筆者）

批評家リチャード・グラヴィル(Richard Gravil) はワーズワスが、この手紙に登場するチョーサー、ミルトン、ホメロス、オシアンに対し、普通の詩人“poet”ではなく「“bard”という用語を選んで使用した」(Gravil 88)ことを指摘している。この詩の中で「より強い力をもつ詩人達(“bards”)」と語り手が言う時、詩人オシアンはその優れた詩人の一群に近いところにいると考えられるだろう。

『オシアン』についての詩で、古典の『アエネーイス』が言及されるのは、ワーズワスのラテン語の知識のおかげである。彼は、幼いころのグラマー・スクールからケンブリッジ大学までラテン語の一貫教育を受け、古典に強い興味をもつようになった。次の章では、詩人の教育過程をたどり、彼の同じ大学の偉大な先達、17世紀の詩人ジョン・ミルトンへの尊敬の念を分析したい。また詩が先行する詩人達へのオマージュになっていることを考察する。

Ⅲ．詩人の古典教育とミルトンの叙事詩

『オシアン』は表紙に「古代の叙事詩(“an Ancient Epic Poem”)」と書かれていて(図２再参照)、これは『アエネーイス』と同じ形式といえる。詩の最終連には、ギリシアの叙事詩人ホメロスと、英国詩人ジョン・ミルトンにオシアンが喩えられている部分がある。まず、ワーズワスの教育とこの２つの叙事詩の関係を考えて、最終連を検討してみたい。

ワーズワスの古典教育の基礎は、８歳から通った湖水地方ホークスヘッド(Hawkshead)のグラマー・スクール時代に育まれた。ここでラテン語をしっかり学び、1787年～91年にケンブリッジ大学のセント・ジョンズ・カレッジ(St. John’s College)に進学し、さらに磨きをかけた。批評家によると在学中の1788～89年に彼はウェルギリウスの『農耕詩』(*Georgics*)の一部などを翻訳している(Stryer 575-76)。

ワーズワスの大学時代に関しては、同じ大学ゆかりのミルトンの存在も重要だろう。『序曲』(*The Prelude*)の第３巻でケンブリッジ大学時代の話があるが、「ミルトンの名前がつけられている部屋(“the very room/Honoured by Milton’s name”)」(*The Prelude* 3： 297-98) にワーズワスは仲間と集ったという。ミルトン以前にも、英国の詩人達は古典を踏まえ叙事詩を書いた。だが、批評家のケネス・ジョンストン (Kenneth R. Johnston) は、「ミルトンの『失楽園』では、以前のすべての神話を近代的にキリスト教で包み込むことで、叙事詩の概念が…変化を遂げた。そのことは、ロマン派時代にさらに再評価されていた」(Johnston 73)と解説をしている[6]。

この詩において、ワーズワスは古典詩人ウェルギリウスだけではなく、英国の詩人であるミルトンにも敬意を示している。最終第５連で、語り手は自分の呼びかけに応じて現れたオシアンの姿をホメロスに喩え、次に「ミルトンのようでもある」と褒め言葉を贈っている。その部分を分析するために英語の原文に下線を引いて示す。

> Appears, on Morven’s lonely shore,
> Dim-gleaming through imperfect lore,
> The Son of Fingal [Ossian]; such was blind
> Maeonides of ampler mind;
> Such Milton, to the fountain head
> Of Glory by Urania led! (ll.77-82)(下線部は筆者)

この最終連では、「そのような」(“such”)という言葉や、下線部を引いた“m”と“l”の音が繰り返され、リズミカルな効果を生み出している。詩の注釈は「盲目のマイオニデス」は、「ホメロス」の別称のことと述べている。マイオニデス(Maeonides)と表現したのは、ミルトン(Milton)と“m”の頭韻を踏むためだ。

それだけではなく、最終連における下線部の、“m”“l”の音の全ての繰り返しが、最後に近い詩行に出てくるミルトン(“Milton”)という言葉に繋がる。最終連の焦点は、この名前に収斂していくのだ。音の効果で、詩人オシアンをミルトンに繋げているといえる。

図３　昔の英雄を呼び出す詩人オシアンの姿

ホメロスとミルトンと並べることで、この詩の中で詩人オシアンの存在を高めたいという目的がワーズワスにはみられる(図３参照)。「叙事詩人」として、詩人オシアンは、17世紀の英国詩人のミルトンや古典のホメロスと共通点がある。

また、「詩神であるウラニアに導かれた」(“by Urania led”) という表現によって、ミルトンの叙事詩『失楽園』(*Paradise Lost*) ７巻の冒頭が言及されている。「願わくは、天より下り給え、ウラニアよ」と始まり「自分の歌を常に導き」給え(*Paradise Lost* 7：1-30)と続く詩神へ祈りの部分である[7]。

さらに、ミルトンは『失楽園』の３巻冒頭ll.32-36、古典詩人を列挙する部分で「己と等しき運命に苦しん

だ…盲目のマイオニデスを….決して忘れることはできない。」(*Paradise Lost* 3：32-36)と述べている。そのミルトンの言葉から、この詩においてホメロスを「盲目のマイオニデス」と表現するアイデアが、ワーズワスに生まれたことが分かる。

では、これらの叙事詩人たちに、詩人オシアンは並べることのできる存在なのだろうか。ホメロスは、「より豊かな精神」(“ampler mind”)を持っているし、ミルトンは「ウラニアに導かれて栄光の源泉へ」と向かっている。つまり詩人オシアンは、この両者の完成度には及んでいないのは、明白である。だが、世間の『オシアン』を「贋作」とする評価に逆らい、詩人オシアンを、2人の大詩人に近い存在に見立てるところに、この詩の構想がある。

2019年に批評家のティム・フルフォードは、後期の詩を扱った*Wordsworthian Poetry 1815－1845*で、この詩をスコットランドを題材とする「最も優れたものの1つ」と評価した(Fulford 138)。そして、「ホメロスやミルトンが彼らの土地でそうであるように、詩人オシアンは、故郷への愛情の表れ、土地に根ざした物語(“localized romance”)の主要人物となっている。」(Fulford 145)と述べている。

この言葉には、本論も同意したい。しかし皮肉にも、この主張は、ワーズワス自身が、詩を1845年に旅行詩に収録したために、隠されてしまった。「土地に根ざした物語」は、外部の者の視点から描く旅行詩の形では表現しにくい。

フルフォードはこの詩を旅行詩の1つとしか捉えていない。さらに執筆された1820年代におけるワーズワスの古典、叙事詩への関心を軽視している。先述したように、ワーズワスは、古典から現代の詩の系譜の中で『オシアン』を捉えていた。この詩は、古典の教養を引用しながら、時と共に詩のテクストが失われていくという普遍的な問題に取り組んでいる。詩人が旅先で創った詩ではなく、むしろ書斎で思索を重ねて創った詩であるといえる。

最近、贋作として貶められてきた『オシアン』が再評価され始めるのと共に、この詩の価値は正しく認識されてきている。本論では、「マクファーソンのオシアンの余白に書かれた詩」は旅行の経験に基づく風景描写の詩ではないことを検証した。これは、古典から近代の文学の流れの中に、『オシアン』を位置づけるために生まれた詩であると言える。

Ⅳ. まとめ

この詩において、ワーズワスは、詩が時の淘汰を受けるという問題を『オシアン』だけでなく、詩一般にまで敷衍して考察している。第2連でウェルギリウスの『アエネーイス』、最終連でホメロスやミルトンへの言及があった。扱う詩の範囲は、詩の第1連から最終連に向かって、広がっていくのである。

真贋論争において、当時『オシアン』が贋作であるとの否定的な審判が下された。ワーズワスはマクファーソンの翻訳・提示の仕方を否定しながらも、この詩を執筆することで、『オシアン』の作品自体は優れているという擁護をしたのだと考えられる。

本論は、この詩がノエル・C・スミスなどの先人の研究を踏まえ、1823～24年のワーズワスの『アエネーイス』の翻訳作業と、それに触れた詩の行について検証した。そしてこの詩が、彼の古典の翻訳活動と密接に関連していることが分かった。ワーズワスが『オシアン』を時代に先駆けて評価したように、この「マクファーソンのオシアンの余白に書かれた詩」も、さらに評価されるべき作品である。

Notes

1）贋作を疑う一派に対し、作品の擁護者も多くいた。1765年にはエディンバラ大学の修辞学教授ヒュー・ブレアが「フィンガルの子オシアンに関する批評的論文」を書き、歴史的に実証を試みている。

2）『オシアン』は18世紀には、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、スウェーデン、ロシア、ハンガリー、ポーランドなどの各国の言語で翻訳が行われた。ゲーテは自分の小説にドイツ語で一節を引用した。ナポレオンは『オシアン』を戦場にも持参した。また日本ではロンドンで学んだ夏目漱石が、『オシアン』の一部の詩歌（「セルマの歌」と「カリツクスウラの歌」）を翻訳し、『英文学叢書』に掲載した。

3）詩のテクストの引用は、Cornell版*Sonnet Series and Itinerary Poems, 1820-45*.のpp.610-12による。この詩は、引用部分において行数、1.のみを記す。また、地の文におけるワーズワスの詩、散文、手紙、それに関する批評家の論の翻訳は筆者による。

4）この部分の日本語訳は、ウェルギリウス『アエネーイス』の岡道男、高橋宏幸訳（京都大学学術出版会、2001年）による。

5）詩人トマス・グレイ(Thomas Gray)は、1775年出版の『湖水地方旅日記』でケズィック(Keswick)の谷を「エリュシオンの谷」と描写した。ワーズワスは1787年にこの旅行記を読んでおり(Wu 70)、この語に親しんでいた。彼は『アエネーイス』の「エリュシオン」について、1808年12月3日の牧師フランシス・ランガム(Francis Wrangham)氏に宛てた手紙などで、具体的に言及している。

6）本論では触れないが、ワーズワスには長大な叙事詩の構想があった。3部構成で、1814年出版された『逍遙』(*The Excursion*)の中の「趣意書(“Prospectus”)」では、「人間・自然・生活」に関する内容だと述べているが、結局断念している。そのため、彼は「叙事詩」にこだわっており、『オシアン』の語り手を、ホメロスやミルトンなどの大詩人に近い存在として位置づけたかったのだと考えられる。

7）この段落と次の段落の翻訳は、ミルトン『失楽園』の平井正穂訳（岩波文庫、1981年）による。

Bibliography

Fulford, Tim. *Wordsworth's Poetry, 1815-45*. Philadelphia: U of Penn P, 2019.

Graver, Bruce E. “Wordsworth and the Language of Epic,”

Studies in Philology. 83.3(1986): 261-85.

Gravil, Richard. *Wordsworth's Bardic Vocation, 1787-1842*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2003.

Johnston, Kenneth R. "Wordsworth and the Recluse," *The Cambridge Companion to Wordsworth*. Cambridge: Cambridge UP. 2003, 70-89.

Landon, Carol. "Some Sidelights on *The Prelude*," *Bicentenary Studies of Wordsworth*. NY: Cornell UP, 2009, 359-76.

MacQueen, John. "Introduction," *Poems of Ossian*. Edinburgh: James Thin, 1971.

McLane, Maureen N. *Balladeering, Minstrelsy, and the Making of British Romantic Poetry*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.

Milton, John. *Paradise Lost*. 1667. Ed. Alastair Fowler. 2nd ed. NY: Longman, 1998.

Moorman, Mary. *William Wordsworth: A Biography*. 2 vols. Oxford: Clarendon, 1965.

Reed, Mark L. *Wordsworth: The Chronology of the Middle Years 1800-1815*. Cambridge MA: Harvard UP, 1967.

Shaver, Chester L. *Wordsworth's Library: A Catalogue, Including a List of Books Housed by Wordsworth for Coleridge from c.1810 to c. 1830*. NY: Garland Pub, 1979.

Smith, Nowell C. "Notes," *The Poems of William Wordsworth: in Three Volumes*. Vol 2. London: Methuen, 1908, 524.

Stafford, Fiona. "'Dangerous Success': Ossian, Wordsworth, and English Romantic Literature," *Ossian Revisited*. ed. Howard Gaskill. 49-72.

Stryer, Steven. "'A Loftier Tone': "Laodamia," *the Aeneid*, and Wordsworth's Virgilian Imagination." *Studies in Philosophy*. 112(2015): 575-97.

Virgil. *The Aeneid*. P. Vergili Maronis Opera. Oxford Classical Texts. Ed. R. A. B. Mynors. Oxford: Oxford UP, 1969.

Winkler, Martin M. "*Tuque Optime Vates*: Musaeus in Book Six of the *Aeneid*," *The American Journal of Philology*. 108.4 (1987): 665-80.

Wordsworth, William. "Essay, Supplementary to the Preface," *The Prose Works of William Wordsworth*. Eds. W. J. B. Owen and Jane Worthington Smyser. Vol 3. Oxford: Clarendon P, 1974.

---. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth*. 8 vols. Oxford: Clarendon, 1967-93.

---. *The Poems of William Wordsworth: Collected Reading Text from the Cornell Wordsworth*. 3 vols. Ed. Jared Curtis. NY: Cornell UP, 2009.

---. *The Prelude*. Ed. Mark L. Reed, NY: Cornell UP, 1991.

---. *Sonnet Series and Itinerary Poems, 1820-45*. Ed. Geoffrey Jackson. NY: Cornell UP, 2004.

Wu, Duncan. *Wordsworth's Reading 1770-1799*. NY: Cambridge UP, 1993.

図版出典：

図１　地図 高橋 哲雄『スコットランド 歴史を歩く』（岩波新書、2004年）のp.ivの地図を基に作成。

図２　表紙はGaskill, Howard. *The Poems of Ossian and Related Works*. by James Macpherson. p39.より引用。

図３　絵画は、*The Sorrows of Ossian, 1825*. by Kisfaludy Karoli. BudapestのMagyar Nemzeti Galeria. (Fine Art Museum) 所 蔵。<https://en.mng.hu/artworks/the-sorrows-of-ossian/>参照。